ゴダンのファミリステールのオリジナリティとその建築・都市史的特性

- 19世紀における労働者向けのコミュニティモデルに関する研究 その2 -

THE ORIGINALITY OF THE GODIN'S FAMILISTÈRE AND ITS CHARACTERISTICS OF ARCHITECTURAL/URBAN HISTORY

- A study on community model for laborers in the 19th century Part 2 -

白 承 冠*

Seung-kwan BAEK

This study analyzes the architectural characteristics in a community model called Godin's Familistère of collective housing for laborers in the 19th century. Utopian socialists in the first half of the 19th century proposed different solutions to reform their chaotic capitalist society, as they criticized the maladies of the Industrial Revolution. Fourier designed a community model called Phalanstère, in which production, consumption and residence coexisted as a cooperative society, and his disciples tried in vain to make it real. Only Familistère, which was constructed in Guise, France from 1858 by the successful entrepreneur Godin, was considered a successful example of the idealistic residential community. However, Familistère was not simply a realization of Fourier's plans, but an original experiment by Godin. Familistère had many kinds of common facilities that were useful for a convenient life, which was the equivalent of having wealth. Moreover, Familistère was a community of production, distribution, consumption, education, leisure and residence, all of which were connected to work-sites. The community also featured a cooperative society of consumption, medical services by the cooperative system and space for schools and leisure.

Keywords : Godin, Familistère, Fourier, Phalanstère, Le Corbusier, Architectural characteristics, Characteristics of urban history

ゴダン, ファミリステール, フーリエ, ル・コルビュジェ, 建築的特性, 都市史的特性

1. はじめに

1-1. 研究の背景

ファミリステールとは、フランスのパリから北東に約200km離れているギーズという町で1858年からおよそ20年かけて、社会改良家であり企業家であるゴダンによって建てられ、現存している集合住宅団地である。このファミリステールは空想的社会主義者であるフーリエの思想を継承したという理念的特徴のみならず、当時の社会問題に対する解決策として実験されたという実質的な側面を反映している。ファミリステールに関する既往研究および報告書などによると、その解釈はおおむね二つに分かれる。第一はフーリエの思想及び理想共同体がそのままゴダンによって現実化されたという解釈である。第二は基本的にはフーリエの影響を受けているものの、フーリエの理想共同体とは異なる独自の実践であったという解釈である。とくに既往研究においては、フーリエの思想がゴダンによって現実化されたという前者の解釈を強調する研究が多い^{注1)}。

しかしながら、「ゴダンが若い時にフーリエのユートピア社会主義の思想を経験したこと、幾つかのフーリエ主義者たちとの協力関係があったこと」^{注2)}で、フーリエが構想したファランステールというコミュニティ理論をそのまま現実化した、と見ることには限界がある。ゴダンは1871年に出版された『社会的解決 (Solutions sociales)』から1889年に出版された『労働の協和局 (La République du trava

il)』に至るまで10冊の著書を通じて、労働権、富の再分配、相互扶助団体、社会安全網、貧困打破、政府改革、社会問題に対する国家介入、国際平和などを含む自身の社会思想を披瀝する^{注3)}。このように、ゴダンの思想にはフーリエの理念とは異なるユートピア的社会主義・社会経済学・雇用主温情主義・改良的社会主義などの多様な思想が現れているためである。以上のような側面から既往研究においては、主に社会学的な研究がなされており、建築・都市史的な観点からの研究は少ないと言える。

1-2. 本稿の目的

本研究は19世紀の歴史的建造物として現存している集合住宅団地であるゴダンのファミリステールを中心とした19世紀の労働者向けのコミュニティモデルに関する建築・都市史的研究である。その一環として近代思想史、近代都市論、社会思想史に及ぶ多くの優れた研究を含む既往研究の批評、即ちゴダンの試みはフーリエ思想の直線的な実践化ではなく、独自色の強いものであるという仮説に基づき、建築・都市史的立場から新たな知見を得るとともに、そうした観点からファミリステールを再考し新しい評価を目指すものである。よって本稿では、ファミリステールの建築的実験のオリジナリティとその社会的意味を考えるのみならず、ファミリステールの建築経緯、建築意匠特性、そして管理運営の特性等を踏まえつつ、ファミリステールに現れる建築・都市史的特性について明らかにする。

* 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻 大学院生・工修

Graduate Student, Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Univ. of Tokyo, M. Eng.

1-3. 研究の方法および資料について

本研究は既往文献調査と2008年10月1日から12月31日まで行った現地調査研究を二つの柱としている。とくに現地調査で得られた文献資料およびファミリステール協会(Le Syndicat Mixte du Familistère Godin)の総責任者、フレデリック・パニ(Frédéric k. Panni)との単独インタビューで得られた成果をもとにしている。

まず、本稿では、第一に「ゴダンのファミリステールの建築的実験はフーリエ思想の直線的な実践化ではなく、独自路線の強いものである」という仮説を裏付けるために、ゴダンが自身の思想を表明するため出版した著書『社会的解決』の解釈を行う。つぎに、フーリエのファランステールとの関連性を把握し、当時の労働者向けの彼のコミュニティモデルに対する独自の理念と考え方を分析する。

第二に、ファミリステールの建設にあたって、代表的なフーリエ主義者であったヴィクトール・カルラン(Victor Calland)との協同作業が失敗に終わった理由、その関連性を調べるために『ゴダンとフーリエ主義者のカルランが交わした手紙』^{注4)}の分析を行う。また、ファミリステール協会の総責任者パニとのインタビューを通じて分析結果を再び検討する。

第三に、以上の分析項目からゴダンの建築的実験の独自性について明らかにしたうえで、ファミリステールに現れる建築・運営的特性について分析する。また、近代住宅・都市へ向かうファミリステールの建築・都市的特性、そしてゴダンとル・コルビュジエの関連を調べることで、時代に先駆けたゴダンのファミリステールの近代のかつ実質的な側面を究明する。

2. ファミリステールの建築的実験の独自性について

2-1. フーリエのファランステールとの関連性

19世紀初頭の空想的社会主義者であるフーリエによって提案されたファランステールという共同体が実際に建設されずにたった一つの理論に留まったとすれば、当時の社会主義者であり企業家であるゴダンのファミリステールは、フーリエの基礎理論と自身の独自の社会思想に基づき、現実化されたコミュニティモデルであったと言える。すなわちゴダンのファミリステールはフーリエのコミュニティ理論に対する批評であり、フーリエの理論をそのまま受け入れなかったゴダンの独創的実験としてみるのできるのである。

しかしながら、ゴダンの社会思想と考え方が完全にフーリエのそれとかけ離れていたとは言えない。ゴダンはフーリエのファランステールを再解釈したと捉えるのが正しいと考えられる。とくに初期段階においてのゴダンはフーリエ主義者であった。彼はフーリエという社会主義者を発見し、フーリエの考え方に心酔した。ゴダンは多数のフーリエ主義者、あるいは弟子たちのように19世紀のフーリエの思想に従った。そのため、ゴダンとフーリエの間に数多くの類似点があるのは当然のことであるが、ゴダンがフーリエの思想全体を受け入れたとは見なせない。それはフーリエの思想が現実問題とはかけ離れていた一方で、ゴダンの思想は複雑な現実問題の解決を目指していたためである。このような姿勢からはゴダンが消極的立場のフーリエ主義者ではなく、自身の独自の見解で批評できる能動的なフーリエ主義者であったことがうかがえる。そして、ゴダンのファミリステールには豊富なアイディアと近代的な考え方が数多く現れている。たとえば労働者生活と住居問題など、与えられた現

実問題を建築的な観点から積極的に計画したことが確認できる。つまり、ゴダンは彼の思想全てに同意したわけではなかったのである。

ファミリステールが計画された当時のゴダンと関係者達の手紙を調べてみると、ファミリステールはもはやファランステールではないことが確認できる。これと関連しゴダンはマリー・ハウランドという米国に住む関係者に送った手紙の一部分で「ファランステールを再現するつもりではない。それはファランステールとは違った新たなモデルになるだろう」^{注5)}と述べている。これについて現在のファミリステール協会の総責任者であるパニは「ファミリステールは基本的にファランステールをもとにしているが、フーリエのファランステールは失敗に終わり、結局実現されたのはゴダンのファミリステールであった。そのためファミリステールは、もうファランステールではない」という見解を示している^{注6)}。このようにファミリステール協会も、ファランステールとファミリステールが辿った経過から、ファランステールはゴダン独自の方法で再解釈されたと認識している。

表1 各コミュニティの一般的な建築特性の比較

	フーリエのファランステール	ゴダンのファミリステール
全体鳥瞰図
理念的背景	自由な情念の再組織化によるコミュニティ	労働現場(工場)と連携された生産、分配、消費、教育、余暇、住居などの複合的なコミュニティ
住民数	900-2000名	1500-1800名
建物形態	[□]形	[□]形
居住形態	個人住居単位で構成	家族単位で構成
配置計画	周辺環境にあわせた配置計画	ゾーニングによる配置計画
生産基盤	農業	工業
家族制度	一夫多妻制	一夫一婦制

例えばフーリエが考えたファランステール内部のギャラリーがその一つの例であり、これはすべての宮殿につながっており、人々がこの空間を利用し宮殿内を自由に移動することができる。一方ファミリステールにはこのギャラリーは存在しない。代りにゴダンは新たな移動方法を創案した。それがガラス屋根をかけた中庭であり、他の中庭に移動することができる。これはゴダンによってファランステールのギャラリーが再解釈された結果であると見なされる^{注7)}。

ファミリステールには社会経済的かつ建築的側面においてもゴダンの独創的な考え方がよく反映されていた。この二つの側面がゴダンにとって常に重要視されたためである。原則的にゴダンがフーリエの考えから参考にしたのは、基礎理論となる労働、資本、協同組合に関する考え方であった。ゴダンはフーリエが考え出せなかった部分までも強く関心を寄せていたため、それらをフーリエとは違った方式で組み合わせようとした。つまり、フーリエが自身の思想を文章として残そうとしたことについてはゴダンも積極的に肯定したものの、現実社会に適用する方式については同意しなかった。これはゴダンが現実社会に合わせた改良作業を目指していたためであった。さらにゴダンは自身の多様な社会思想をもとに現実社会に合わせた理想的コミュニティモデルを目指した。その結果、ファミリステールは財政的問題など、複雑な現実社会の中で建設された。パニによると、ゴダンはファミリステールの建設にあたってフーリエ主義者、哲学者、社会主義者などの協力によったのではなく、彼の工

場で働いている労働者達やその家族の協力を求めたことが確認された^{注8)}。このように、ゴダンは恣意的に選択した人々ではなく、現実社会の中で身近に存在する人々との作業を望んでいたと言える。

以上述べたように、ファミリステールとファランステールの関連を論じるにあたって、一つは現実の中に存在しており、もう一つは存在しないという事実を常に考えておく必要がある。つまり、ファランステールは理論だけで留まったが、ファミリステールは実際に建てられ、現在まで残されているという事実を強調しておきたい。とくに、ゴダンの独創的考え方でフリーエの考えと基礎理論を再解釈したという点に、それがファミリステールにどのように適用され表されているかに注目する必要がある。

2-2. ゴダンとヴィクトール・カルラン(Victor Calland)との関連性

フリーエ主義者であり建築家であるヴィクトール・カルランとアルペール・ルノワール(Albert Lenoir)は、ファミリステールの家族宮殿を計画していた。家族宮殿に対する彼らの考えはゴダンに伝えられ、ファミリステールという名称に見るように家族という意味が付けられた。この点からファミリステールをファランステールの一断面として見なすことができるのである。しかし、ファミリステールの計画についてゴダンとカルランが交わした手紙は3通あり、その手紙を通じてゴダンはカルランの考えが非常に非現実的であると判断していたことが確認できる^{注9)}。このため、当初はカルランとの協同作業を望んでいたが、早くに中断してしまった。カルランが考えたファミリステールは全体的な財政状況や労働者のための住居計画などが詳しく検討された漸進的な発展計画案ではなく、利益だけを追い求め現実離れた計画案であると、ゴダンは判断した。すなわち、ゴダンはファミリステール建設のための財政が充分でないなかで、段階的に建設することが正しいと考えたのである。ゴダンはこうした財政的不安要素を考慮し、ファミリステールの『社会宮殿』^{注10)}をはじめ、多様な施設を順次段階的に建設していくことにした。

とくに社会宮殿は三つの独立したユニットで建てられた。最初の左側の住居棟が1859年に、二番目の中央の住居棟が1866年に、つぎの左側の住居棟が1877年に建設された。このようにすべての建物が同時に建設されたのではなく、段階的な建設計画が成り立っていたのであった。このようにファミリステールの財政状況や労働者の住居空間などを考慮した漸進的な発展計画案ではなかったカルランの計画はもう存在しなかったのである。結果的にゴダンとカルランとの関係は、短い間の協力関係は存在したが、カルランがゴダんに影響を与えたとは言えない。こうしたゴダンとカルランの一連の協力関係を考えてみると、ゴダンとカルランがある程度の関連性を持っており、協同作業があったとみること、すなわちカルランがゴダんに影響を与えたとは言えないであろう。これについては、以上で述べたようにゴダンとカルランがやりとりした手紙を通じて確認できる^{注11)}。まさにこの点が、ゴダンとカルランとの関連性について集約できる重要なことである。つまり、「フリーエのファランステールとゴダンのファミリステールの相関性」^{注12)}を強調する既往文献及び研究の解釈とは異なり、ゴダンの試みはフリーエ思想の直線的な実践化ではなく、独自色の強いものであるという本稿の解釈はゴダンのファミリステールの建築的実験のオリジナリティを高める部分もあるであろう。そして、こうしたゴダンの独創的な考え方を現実に適用した場所がファミリステールであったのである。

3. ファミリステールの建設と運営

3-1. ファミリステールの建築的特性

1853年、ゴダンはフリーエ主義者コンシデラン(V.Considerant)とアメリカのテキサスにファランステールの建設を試みたが、失敗に終わってしまう^{注13)}。フランスに戻ってきたゴダンは1857年に自身の工場労働者のための共同住宅団地を建設しようとする。1857年12月ゴダンは家族宮殿を計画したフリーエ主義者カルランと手紙のやりとりをしながら、自身の計画を提案し、ギーズの労働者向けコミュニティモデルを準備するが順調ではなかった。また、カルランと共に家族宮殿を計画した建築家アルペール・ルノワールがギーズを訪問して、具体的な計画を準備したものの、ゴダンは自らファミリステールという理想的コミュニティモデルを設計したのである^{注14)}。

ファミリステールは1858年から本格的に計画され、建築家や都市計画家などが介入しないまま建設された。ゴダンはファミリステール計画のマスタープランを構想した。そして建設にあたって必要な作業を進めた。ゴダンにとって建築上の問題は最終的には社会改良の問題に帰結された。「建築が社会を変化させる」^{注15)}と認識したゴダンは、他人や社会が必要とする生活環境を十分に備えた新しい建築の適用を強調した^{注16)}。すなわち、ゴダンは社会改良を目指し、そのために住居空間の改革を進めたのである。とくに同時代の建築家でゴダンが考えていたような社会改良に係わる建築的構想を持つ者はあまりいなかった。ゴダンの考え方は、1858年の土地の取得、1859年からの三つの建物、いわゆる社会宮殿の建設へと繋がっていく。1860年には119世帯の住宅をそろえた左側の建物が完成し、1865年には350世帯の住宅をそろえた中央建物が、1879年には89世帯の住宅をそろえた右側建物が完成した。この三つの建物の収容人員は約1800-2000人で、1880年には1770人が居住していた。つぎに1883年には工場の労働者たちが増え、別の住居棟が追加された^{注17)}。

表2 ファミリステールの建築経緯

番号	施設名	建築年度	備考
1	左側の住居棟	1859	世界大戦期に壊れ、1923-24年に再建
2	中央の住居棟	1866	現在復元工事中
3	幼稚園および保育所	1866	1918年に大戦で破戒
4	付属棟(商店、肉屋)	1859	現在復元工事完了
5	学校および劇場	1870	労働者たちに最初に提供された公共サービス
6	洗濯場、浴場、プール	1870	
7	右側の住居棟	1877	居住人数1200名
8	広場	1858	
9	工場 ^{注18)}	1846	株式会社[LE CREUSET]により運営中
10	観賞用庭園	1858	
11	樹木地帯	1862	
12	野外音楽堂	1872	
13	キャンブレ住居棟	1884	
14	ランドレン住居棟	1883	
15	オワズ川		

各住居建物は4階建てになっており、地下倉庫と屋根裏部屋が設けられている。そして通風や採光などに配慮した住居環境が設けられているほか、各階ごとに自然の光、風、緑を身近に感じられるようにバルコニーを備えている。各階の中庭側も回廊(rue-galerie)になっており、すべての世帯をつなげている。また、居住者たちは各住居

棟の隅に位置した幅広い階段と、三つの住居棟と連絡する天井がかかった通路によって、内部を自由に移動できる。ガラスの天井に覆われている中庭は各種行事が行われる場所でもあり、子供たちの遊び場としても活用された。そして回廊からは中庭で遊ぶ子供たちを見守りながらくつろげるようになっている。各世帯は基本的に台所と二つの部屋で構成されており、各部屋の広さは15-20平方メートルになっている。それぞれの部屋は隣の世帯の部屋と簡単に結合できるように設計されており、世帯構成員が多くなった場合は、部屋を追加することが可能であった。そして各階には給水施設、手洗い、ダストシュートなどの衛生に関わる設備が設けられていた。とくに給水施設においては、工場の蒸気を用いて温水を使用できた^{注19)}。

そして住居棟の社会宮殿の建設にあたって、各種生活サービス施設をそろえた多様な付属建物が相次いで建設された。1862年に中央建物の後ろからつながる幼稚園と保育所が、1865年にはベーカリー、食料品店、カフェなどの付属建物が建てられた。つぎに1869年には学校と劇場が、1870年に洗濯場、浴場、プールなどの公共サービス施設が次々に建設された^{注20)}。こうした多様な施設の建設にあたっては、環境問題も積極的に取り上げられていた。例えば社会宮殿は工場から近いところに位置していたが、騒音と空気汚染の被害が少ないようにオワズ(Oise)川を中心に工場と社会宮殿が離れて計画された。さらに社会宮殿の周りは3.5ヘクタールの緑地帯が確保されており、その中には噴水がある芝生広場をはじめ、散歩道、観賞用庭園、運動競技場などが設けられた。

こうした建物の基本設計と配置は、人々が必要とする物理的環境や居住者たちの社会性の発展を容易にする、いわゆるコミュニティの活動を促すこと等、社会的環境への配慮が意図されたと見られる。

3-2. ファミリステールの運営的特性

ファミリステールの付属建物に設けられた各種公共施設は、ゴダンの考えが実現された重要な場所であった。教育が強調され幼稚園と14才までのこどもへの初等教育が義務化されたほか、大人たちには夜の時間を利用した生涯教育プログラムが提供された。そして食料品店は消費生活協同組合により、医療サービスは相互扶助の原理によって運営された。一方、女性たちのためには家事労働をはじめ、子どもの教育と子育ての負担を減らすための各種教育施設だけでなく、事前に準備された食べ物を提供する共同食堂などが設置され、より自由な社会的活動が可能とされた。そして周辺の公衆衛生および生活環境は、雇用者によって管理された。とくにファミリステールにおいては、基本的な労働の意義を見出し道徳性を高めるとともに、広い意味でのコミュニティ活性化を促すために各種文化行事が行われた。こうした各種文化行事はファミリステールの居住者たちが自発的に構成した一種の社交クラブによって担当された。こうした中で居住者全体が準備し参加した代表的な行事は、1863年から毎年9月の最初の日曜日に行われた子供祭りと1867年から毎年5月の最初の日曜日に行なわれた労働祭りであった^{注21)}。

ファミリステールは工場の利潤と住宅の様々な問題を審議する行政委員会、労働と関連問題を審議する労働委員会および居住者の参加する総会で民主的選挙によって選ばれた男女12名ずつの代表者を通じて運営された。医療・教育・相互扶助基金・消費生活共同組合などの各種サービス施設あるいは制度においても、各々の関連委員会を構成して運営するシステムであった。つまり、このような機関

の構成と運営によって、居住者は自ら共同体に対する問題に積極的に参加するようになった^{注22)}。

ゴダンファミリステールの居住者たちが守るべき指針を作成し配布したが、その指針が守られるかどうかを監視する人はいなかった。各人と各世帯の私的活動においては、共同体的秩序を害しない限り自由な生活が可能であった。一方、ファミリステールの構成員が居住者としての権利と資格を喪失する場合は、以下のように、(1)泥酔、(2)他の居住者たちに迷惑を与える行為と住宅の不清潔さ、(3)不正直な行為、(4)勤務(労働)怠慢、(5)無秩序な行為と暴力行為、(6)子供たちに与えられべきである義務的な教育の拒否、(7)協会が承認していない居酒屋の営業行為などであった^{注23)}。1880年には「資本と労働の協会(l'association coopérative du Capital et du Travail)」という生産、分配、消費、住居などを含む統合的協同組合が設立された。ゴダンは社会宮殿を計画し建設しながら、単に労働者たちの住宅問題のみに留まらず、より住宅と労働現場を連係する理想的コミュニティモデルを計画した。資本と労働の協会結成はこれらのゴダンが考えた理想的コミュニティが最終的に具体化されたことを意味した。すなわち、単純に社会宮殿が持っていた住宅としての機能的魅力はゴダンにとって副次的なことであったのである^{注24)}。

このようにゴダンはファミリステールの居住者たちによる自発的な運営を通じて、フーリエが考えた「情念の効率的作用による抽象的幸福」^{注25)}を追求しようとしたのではなく、労働の楽しみと労働の成果に対する正しい分配を通じて物質的かつ道徳的幸福を追求しようとした。これと関連しゴダンは1880年以前に労働者との間の労働評価および投票、労働者(従業員)持株制度、自律的労働組合の結成など労働者たちに富の分配と労働組合の結成、工場の経営などに参加させるための多様な方法を実験したものの、その成果は期待に達することができなかった。そのため、ゴダンは資本と労働を均衡的に発展させ生産、分配、消費、住居に係わるすべての領域を協同組合的方式で運営することを希望したのであった^{注26)}。

一方、19世紀半ば以来の「温情主義」^{注27)}的雇い主であった企業家たちは、労働者の住宅問題を解決するための多様な労働者住居村を建設した。フランスのアルザス地方のミュルーズ(Mulhouse)産業家たちは、1825年ミュルーズ産業家協会(Société industrielle de Mulhouse)を結成した。つぎに1830年代から1840年代にかけて労働者の健康保護のために保健所を建設し、傷害基金、引退基金などの運営を支援した。そして1853年からは労働者住居村のミュルーズ協会(Société Mulhousienne des cités ouvrières)を結成し、安くて衛生的な労働者住宅団地の建設を支援した。1862年からセヌ・エ・マルヌ(Seine-et-Marne)県のノワジエル(Noisiel)にチョコレート工場を運営した企業家のムニエ(E. J. Menier)によって、自身の工場労働者の為に建設された住宅団地は、安い価格の生活必需品店と食堂、託児所と学校、薬局など住宅団地内の暮らしに便利な共同施設を揃えた。

しかしながら、こうした事例はゴダンの目には真の社会的進歩、あるいは人間の解放を追求するものではなく、単純に労働者の住宅問題を解決するための一つの方法として映った。以上の事例以外にも中小産業都市で温情主義的雇い主であった企業家たちによって建設され支援された労働者住居村は多かった。しかしこのような住宅団地は当時の住宅難を解決し労働力の安定と能率を高め、生産拡大に寄与し、そして雇い主が道徳的かつ象徴的権威を誇示し労使問題

で優位を占めることだけに留まったと見られる^{注28)}。

これに反しゴダンファミリステールを通じて資本主義体制での抑圧的で疎外された労働の代りに、自発的で楽しい労働が行われることを望んでいた。また、「居住者たちが労働を通じて人間の知的かつ道徳的解放を達成すること」^{注29)}とともに直接的な企業活動への参加によって分配の正義が実現されることを目指していた。これにより1880年には労働と資本の協同組合という協会が整備され、工場経営においての労働者たちの直接参加と自主管理 (autogestion) が保障された^{注30)}。資本と労働の協会においては構成員たちの知的かつ道徳的発展が最も重要と考えられた。そしてすべての居住者たちが豊かな生活ができるようにすること、苦痛と病気を克服するようにすること、子供たちの教育を可能にすることなどが重要視された^{注31)}。さらに、ゴダンは労働と資本の結合が社会的進歩と産業発展を同時に可能にすると考えた。彼は労使間の真の代表を組織することが近代的な企業家たちが研究し解決すべき最も重要な問題の一つと考えた。また企業活動への労働者たちの参加は、産業と市場の発展につながると考えていた^{注32)}。ちなみにファミリステールの資本と労働の協会の構成員は次のように分類される。

表3 資本と労働の協会の構成員^{注33)}

構成員	年齢	居住期間	労働期間	決定機関	配分
協会員 (associé)	25歳以上	5年以上	5年以上	協会総会	2
共同体員 (sociétaire)	21歳以上	3年以上	3年以上	協会総会	1.5
協会参加者 (participant)	21歳以上	1年以上	1年以上	委員会	1
補助者 (auxiliaires)	各種生活サービスのため雇用された従業員				

ゴダンは1888年1月に多くの遺産をファミリステールに残して死去した。ファミリステールでは創始者不在の状況下、資本と労働の協会は住民たちの自発的参加によって維持され、社会宮殿や工場などの円満な運営がつづけられた。二度の世界大戦により建物の一部が壊れ、幾度も経済危機にさらされたにも関わらず、工場は着実に成長発展した。しかし、1950年から1960年に至るまでは産業発展を達成したもの、以後数多くの経済的困難に直面することになる。1968年には資本と労働の協会が解散し、工場は株式会社の形態をとった。1969年に庭園や付属建物(劇場、学校、図書館)などが市の所有になり、住宅も売られ、資本と労働の協会 (l'association coopérative du Capital et du Travail) が1880年に創設され、以降88年にわたる運営に幕を下ろすことになる。しかし、2000年以降は文化遺産に指定され、地方自治体、政府、ヨーロッパ連合の補助金を受けながら、経済、文化、建築分野で多様な社会教育的活動を展開している^{注34)}。

4. 近代住宅・都市へ向かうファミリステール

4-1. 機能と拡張を考慮した住居(ユニット)

ファミリステールの住居棟において、玄関から伸びる空間は収納機能を備えており、またトイレにも使える。全部屋が伸縮自在で二つの部屋から六つの部屋に変更可能となっている。たとえば子供のいない夫婦は一つの部屋を利用し、家族が増えたら部屋を増やすことができる。さらに子供たちが結婚して別の世帯を構成する場合は部屋を減らすこともできるようになっている^{注35)}。

このように住居空間を最大限活用するための、世帯構成員の変化に合わせた住居の機能と拡張を考慮したユニットは、極めて近代的

な考え方であると言える。

4-2. 近代的な住宅設備

ゴダンは住宅に関して人に役立つ建築を目指し、他の一般的な住宅には見られない設備を配している。例えばまず全棟を明るく風通しを良くするため、外側と中庭側の両方に大きな窓を設置した^{注36)}。この光は納屋と地下室のみならず、中庭の下部に設計された倉庫にも換気口を通じて差し込んでいる。一方、ガラス天井の温室効果を防ぐため、ゴダンは簡素な自然の空調を利用している。空気は換気窓を通して地下室に届き、再び横穴から中庭に出て行くのである。これと同時に屋根の開口部にも常に風を通し、空気を入れ替える換気方式が採用されている。これは夏は涼しく、冬は暖かくする空調ダクトのようなシステムである。また、後世に残るもうひとつの発明は、ダストシュートの原型である。これとともに住宅には水道も引かれ水の心配は不要となり、各階に水飲み場やトイレも設置されている^{注37)}。以上の設備は、当時パリの住宅の大半にはなかった空気、空間、光等を用いた快適で近代的な設備であったと考えられる。

4-3. 機能的なゾーニング

19世紀半ば以前、あるいは同時代の理想的な都市計画において、小規模に制限された閉鎖的な共同体が提案されたことに対して、ファミリステールは、全体的に敷地形状を活かし、職住分離の考え方を取り入れていると言える。またファミリステールの全体的な配置においては、住居ゾーン、グリーンゾーン、教育・文化ゾーン、商業ゾーン、工場ゾーンなど、職・住・遊空間に区分する手法で、機能的なゾーニング計画がなされていたことが確認できる。

4-4. コミュニティ形成を促す装置

ファミリステールには居住者たちの健康で豊かな生活のための施設や設備を設けるなど、物理的な環境のみならず、消費生活協同組合による運営、相互扶助体系による医療サービスの提供、共同託児、義務教育・生涯学習プログラムなどの社会環境への配慮もみられる。これは労働と資本の協会の運営によって居住者に効率的かつ合理的に提供された。さらに、生産と富の分配のための委員会についても、労働者が積極的に参加するよう、労働者の自主管理によって運営がなされた。つまり、ファミリステールの各種社会的な装置は、他の共同体住居団地では見られない労働現場と連携した生産、消費、分配、教育、余暇に至る複合的なコミュニティであると言える。この点は、他の産業資本家たちによって試みられるも失敗に終わったコミュニティモデルの限界点が何なのかを示唆しているといえるだろう。さらに20世紀以降の都市における建物、住居、人間の単なる物理的な集合が増加する傾向や社会的な連帯、あるいは公共性の退歩など、その問題点に対する解決策についても示唆していると考えられるのである。

5. 建築・都市史的観点からみたゴダンとル・コルビュジェ

ゴダンとル・コルビュジェの関係を論じる前に、ゴダンは建築家ではなかったということ、そしてル・コルビュジェは建築家であったという点に注目する必要がある。すなわちル・コルビュジェは社会改良家ではなかったため、ゴダンとル・コルビュジェの間に社会的、経済的側面からの関連性はないと考えられる。ゴダンはファミリステールの運営において労働者たちの直接参加を導入することなど、理論上の運営ではなく、現実的かつ実質的な側面を重要と見な

した。そして社会改良という目標を成し遂げるために建築上の問題、とくに住居に対する改革を実践したのであった。このようにゴダンとル・コルビュジェは、住居問題というカテゴリーの中で接点を持つのである。換言すると、片方は社会改良家であり企業家の立場として、もう片方は建築家の立場として互いに接することになったと言える。一方、現在のファミリステール協会の総責任者、パニは以下のように述べている。

「ファミリステールが水平的概念の集合住居単位であるとすれば、ル・コルビュジェのユニテ・ダビタシオンは垂直的概念の集合住居単位であり、コンクリート構造という技術的特徴が建築物の高さにその差異点を作り出している。しかしこの垂直的概念の集合住居単位にはファミリステールの水平的概念の集合住居単位に含まれている建築的要素を見出すことができる。学校、商店、食料品店、近代的で親和的な環境の住居空間、そして多様な行事などのコミュニティを可能にする集合的空間などがその例である。また屋上に用意されている演劇空間のように、人々のコミュニティを活性化するための積極的な建築的装置を取りそろえてあり、人々に有益な物理的かつ社会的要素が総合的に計画されていた。これらはファミリステールを実現したゴダンの考え方と似ていると言える」^{注38)}。

このようにゴダンとル・コルビュジェとの関係においては、幾つかの共通点を確認することができる。光、空気、自由な平面(空間)などの建築的要素の適用がその代表的な例であり(写真1)、新鮮な空

写真1 ル・コルビュジェの理想としていた全面採光と自然換気が可能な建築要素の適用^{注39)}

気、豊富な採光、流れる水などを利用した近代的な建築設備についてゴダンは1870年に自身の著書『社会的解決』を通じて述べている。こうしたゴダンの著書に接している時には、図1のようにさながらル・コルビュジェの著書に接しているかのような錯覚に陥りやすいということである。

図1 光、空気、空間などの人間に必要なすべてがそろった建築をめざしたゴダンと(左)ル・コルビュジェ(右)のスケッチ^{注40)}

この『社会的解決』はおおよそ650ページ程度で構成されており、ファミリステールに関する多様な社会思想と理論について述べている。特にゴダンが当時のファミリステールの建築的基盤施設と衛生施設について述べている部分は、図1のように20世紀にル・コルビュジェが論じた空気、採光、換気と関連する建築用語、言い換えると衛生と関連した住居空間の概念に非常に類似していることが確認される。

以上のように、建築・都市史的側面からみたゴダンとル・コルビュジェの間には、別の分野で、別の時代に活躍した人物であったにも関わらず、類似の発想や考え方が見出された。これらに共通した特徴は、理想的コミュニティのために実現されたファミリステールの、時代に先駆けた近代的かつ実質的な側面を示唆しながらも、コミュニティ実験としての独創性を示していると言えよう。

6. おわりに一まとめと今後の課題

本稿では19世紀の労働者向けのコミュニティモデルに関する研究の一環として、ファミリステールの建築的実験のオリジナリティとその建築・都市史的特性について以下のことを検証した。

まず、ゴダンの試みはフーリエ思想の直線的な実践化ではなく、独自路線の強いものであるという仮説を裏付けるために、ゴダンの著書『社会的解決』と『ゴダンとフーリエ主義者のカルランが交わした手紙』の分析を行うとともに、協会の総責任者のパニとのインタビュー内容の分析と解釈を行った。その結果、ファミリステールはゴダンによってフーリエの基礎理論や考えが再解釈され、ゴダンの独創的な考え方をもとに現実化されたということが見出された。

そして、ゴダンの独創的な考え方がファミリステールにいかに関適用され表されているのかについて建築・都市史的観点から分析を行った。その結果、ファミリステールの建築経緯においては、ほぼ20年をかけて漸進的かつ段階的に住居棟および多様な施設が建設されたことが確認された。また運営面においても19世紀の理論のみを中心としたユートピアに留まらず、住民を中心とした適切な運営原理に基き、物理的な環境と社会的な環境を同時に提供したという点が明らかになった。さらにゴダンのファミリステールにおいては、機能と拡張を考慮した住居単位(ユニット)、近代的な設備、機能的なゾーニング、コミュニティ形成を促す装置など、近代住宅、近代都市へ向かう実質的な計画であったということが判明した。

また、19世紀から20世紀にかけての建築・都市史的観点からみたゴダンとル・コルビュジェとの関係について調べた結果、一方は19世紀の社会改良家でありながら企業家の立場で、もう一方は20世紀の建築・都市計画家であったにも関わらず、住居問題という共通したカテゴリーの中で接点が見出された。とくに20世紀にル・コルビュジェが論じた空気、採光、換気などの衛生と関連した住居空間の概念は、1870年にゴダンが『社会的解決』のなか記した新鮮な空気、豊富な採光、流れる水を利用した建築設備などと類似していることが確認された。すなわち、ゴダンとル・コルビュジェの共通性からは、ファミリステールの時代に先駆けた近代性と現実性を示唆しかつなった。次稿においては、いまだに当時の姿のまま残されており、住民が居住しているファミリステールに関して、19世紀から20世紀に至るまでの歴史的建造物としての保存・活用についても稿を改めて論じたい。

謝辞

本稿は、平成22年度笹川科学研究助成(研究番号22-106：19世紀における労働者向けのコミュニティモデルに関する建築・都市史的研究)による研究成果の一部である。ここに記して謝意を申し上げる。

注

- 注1) 白承冠、「19世紀における労働者向けのコミュニティモデルに関する研究 その1-理想的コミュニティを目指すゴダンのファミリステールについて-」、『日本建築学会計画系論文集』第75巻 第647号、2010年1月、pp.224 注2)を参照。
- 注2) ゴダンの若い時期については J.-B.A.Godin、*Solutions sociales*、pp.8-12、pp.42-43. Guy Delabre、Thierry Paquot、Marc Bédarida、*Habiter l'Utopie*、pp.26-27、pp.48-49.
- 注3) Jean-Baptiste André Godin、*Solutions sociales* (Paris:A. Le Chevalier et Guillaume 1871, La Digital, 1979);*La souveraineté et les droits du peuple* (Paris:Librairie de la Bibliothèque démocratique, 1874);*La politique du travail et la politique des privilèges* (Paris:Librairie de la Bibliothèque démocratique, 1875);*Mutualité sociale et Association du Capital et du Travail ou Extinction du paupérisme par la consécration du droit naturel des faibles au nécessaire et du Droit des Travailleurs à participer aux bénéfices de la production* (Paris:Guillaumin, 1880);*Le Gouvernement, ce qu'il a été, ce qu'il doit, être. Et le vrai socialisme en action* (Paris:Guillaumin, 1883);*L'hérédité de l'Etat ou la réforme des impôts* (Paris:Guillaumin, 1884);*Travail et consommation par l'hérédité nationale* (Paris:Guillaumin, 1886);*La République du travail et la réforme parlementaire* (Paris:Guillaumin, 1889).
- 注4) カルランは、フーリエのファランステールをアメリカのテキサスで実験しようとした代表的なフーリエの弟子であり、建築家である。そして、ファミリステールの建設にあたって協同作業をおこなった人物である。ゴダンが何故カルランにファミリステールの社会宮殿の計画を任せなかったのかについて論じている資料は、ほとんどないといえよう。しかし、ゴダンにより1871年に出版された『社会的解決(*Solutions sociales*)』とともに、1858年1月26日に『ゴダンがカルランに返信した手紙』は、ファミリステールはフーリエ思想の直線的な実践化ではなく、独自路線の強いものであるという仮説を裏付けるために、一次史料として貴重なものである。
- 注5) Frédéric k. Panni、*Lettres du Familistère*、Les Éditions du Familistère、2008、pp.115-123
- 注6) このような考え方は当時19世紀のフーリエ主義者たちと20世紀歴史家あるいは研究者たちが注目してこなかった部分であろう。
- 注7) 2008年9月から12月まで全5回にかけて行ったファミリステール協会の総責任者フレデリック・パニとの単独インタビューより。
- 注8) 同上
- 注9) Frédéric k. Panni、*Lettres du Familistère*、Les Éditions du Familistère、2008、pp.16-17
- 注10) 詳しく言及すると、ファミリステールは住居施設、学校、商店、工場などの全体を意味し、社会宮殿はファミリステールの中に建てられた相互連結した三軒の共同住宅を意味する。しかしゴダンを含め、当時の人々、そして、既存の研究者たちにより、この二つの用語があまり区分されずに使われているものの、本来筆者が目指す研究と本稿における社会宮殿は住居施設だけを意味する。
- 注11) 1858年ゴダンがカルランに送った手紙に、カルランとの協力関係を中断するという趣旨が書かれている。；Frédéric k. Panni、*Lettres du Familistère*、Les Éditions du Familistère、2008、pp.16-17
- 注12) 白承冠、「19世紀における労働者向けのコミュニティモデルに関する研究 その1-理想的コミュニティを目指すゴダンのファミリステールについて-」、『日本建築学会計画系論文集』第75巻 第647号、2010年1月、pp.224 注2)を参照。
- 注13) J.-B.A.Godin、*Solutions sociales*、pp.146-151, Thierry Paquot、Marc Bédarida、*Habiter l'utopie*、pp.29-30.
- 注14) ゴダンが何故カルランに社会宮殿の計画を任せなかったのかについて論じている資料は、ほとんどないといえよう。しかし、1871年にゴダンが著した『社会的解決(*Solutions sociales*)』を見ると、テキサスでファランステールの実験を試みたフーリエの弟子たちの能力を信じたことは間違いであったとゴダンは考えを改め、工場の労働者たちのための新たな住宅団地を計画し、社会的改良を試みようとして決心していた。さらに、ファミリステールを計画するに当たっては「これ以上フーリエ主義者たちの考えに基づく実験にはならないだろう」と述べている。
：J.-B.A.Godin、*Solutions sociales*、pp.150-151.
- 注15) ゴダンは、建築は人間が必要とする物質的要素の中でもっとも重要な

位置を占めるものと見なした。また、建築は人間と社会をつなげるものとして、いわゆる建築の進歩は人間生活の社会的進歩向上につながると考えていた。：J.-B.A.Godin、「*Solutions sociales*」、pp.418.

- 注16) 白承冠、「19世紀における労働者向けのコミュニティモデルに関する研究 その1-理想的コミュニティを目指すゴダンのファミリステールについて-」、『日本建築学会計画系論文集』第75巻 第647号、2010年1月、pp.223 左コロンヌ・中程を参照。
- 注17) Thierry Paquot、Marc Bédarida、*Habiter l'utopie*、pp.134-135
- 注18) 1840年に二人の労働者を雇用したゴダンの事業場は、1846年に30人、1880年に1500人を雇用するほど発展した。1880年には関連品目の生産において世界最高であった。-Thierry Paquot、Marc Bédarida、*Habiter l'utopie*、pp.17. Annick Brauman、Jean-Baptiste André Godin、pp.45.
- 注19) ゴダンの著書『社会的解決』の第二十章には社会宮殿の詳しい説明が載せられている。全体的な設計:pp.441-444、建築の詳細:pp.445-455、換気と暖房:pp.476-484、給水施設；pp.490-493、採光と照明:pp.499-507、安全問題；pp.509-511、部屋追加；pp.603.
- 注20) J.-B.A.Godin、*Solutions sociales*、洗濯場、浴場、プール；pp.494-498.
- 注21) Ibid、消費生活協同組合；pp.460-475、共同食堂サービス；pp.513、医療サービス；pp.549-550、教育一般；pp.551-571、授乳と保育；pp.572-582、幼稚園と学校；pp.583-595、従業員；pp.595、文化行事とまつり；pp.605-609.
- 注22) J.-B.A.Godin、*Solutions sociales*、1871、運営体系；pp.619-624
- 注23) Ibid、内部規則；pp.610-613、処罰の対象となる具体的な行為については、1880年に設立された資本と労働の協会規定から引用した。Familistère de Guise, Association coopérative du capital et du travail, Statuts, art 26
- 注24) Lettre du 2 mars 1866 à Savardan, Citée par Annick Brauman, Jean-Baptiste Andr Godin, pp.51
- 注25) BYUN Gi-Chan、「フーリエの“文明”批判」、フランス史研究 3、2000.8、pp.53-77、J.Beecher、Charles Fourier・The visionary and his world (Berkeley:University of California Press. 1986)
- 注26) それに従い、1880年に設立されたのが資本と労働の協同組合(l'association coopérative du Capital et du Travail)である。本稿の「3-2. 節」の「ファミリステールは工場の利潤と住宅の様々な問題を審議する～このような機関の構成と運営によって、居住者は自ら共同体に対する問題に積極的に参加するようになった」で示したように、この時期から工場経営に対する労働者たちの直接参加と自主管理が保障された。
- 注27) 使用者と労働者との関係を、その利害が基本的に対立する階級関係としてではなく、使用者の温情と従業員の忠誠心に基づく協調関係として説明し、労使関係の安定を図ろうとする労務管理の一方。
- 注28) Bulletin、*De la Société française des habitations à bon marché*、n.4、1892、pp.450-455.
- 注29) 白承冠、「19 世紀における労働者向けのコミュニティモデルに関する研究 その1-理想的コミュニティを目指すゴダンのファミリステールについて-」、『日本建築学会計画系論文集』第 75 巻 第 647 号、2010 年 1 月、pp.222 右コロンヌ・中程を参照。
- 注30) 資本と労働の協会は効果的な自主管理による労働者たちの積極的な運営参加を目指した。Annick Brauman、Jean-Baptiste André Godin、pp.39
- 注31) J.-B.A.Godin、*Mutualité sociale*、1880、pp.67
- 注32) J.-B.A.Godin、*Solutions sociales*、1871、pp.640
- 注33) Jean-Luc Pinol、*Le Palais social : les projets de Godin et les pratiques familistériennes*、Thierry Paquot & Marc Bédarida、*Habiter l'utopie*、pp.76.
- 注34) Syndicat Mixte du Familistère Godin、*Voyage en Utopie*、2008；1968年に協会は解散したが、2000年以降に再設立された。そして2008年から2015年にかけては、ユートピアというプログラムによって古くなった建物や施設の復元・再整備をはじめ、ファミリステールの全体的な保存・活用に関する多様な事業が予定されている。これについては別稿で論じたい。
- 注35) J.-B.A.Godin、*Solutions sociales*、1871、部屋の追加要求；pp.602-605
- 注36) ゴダンはファミリステールの住居を照らす光を啓蒙社会の知的進歩の兆しと考えた。
- 注37) Ibid、換気と暖房；pp.476-484、給水施設；pp.490-493、採光と照明；pp.499-507
- 注38) 2008年9月から12月まで全5回にかけて行ったファミリステール協会の総責任者、フレデリック・パニとの単独インタビューより。
- 注39) 2008年の現地調査で得られた写真資料により。
- 注40) Annick Brauman、Jean-Baptiste André Godin、1817-1888；*Le Familistère de Guise ou les équivalents de la richesse*、Deuxième édition revue et augmentée、1980/Landscape of Architectures Volume 1：1995-2000 Arte France-Les Films d'Ici-Le Centre Georges Pompidou-Direction de l'Architecture et du Patrimoine-Le Musée d'Orsayより。

(2009年11月1日原稿受理、2010年4月27日採用決定)